

クリスマスの頃になると、イブ礼拝後に、数人の教会メンバーと共に、街角や駅前で、ローソク片手に、キャロルを歌い回ったことが思い出されます。なかでも、戦争孤児の施設一、急な坂下にあるエリザベツ・サンダース・ホームの階段に並びながら、寒さに震え、白い息を吐き吐き、キャロルを讃美したことが懐かしく思い出されます。眼下には、横浜市街の光がまたたいています。元町の商店街が、中華街が、マリン・タワーが、横浜ふ頭が、氷川丸が一望できるではありませんか。街にはジングル・ベルが鳴り響き、ケーキが飛ぶように売れ、家庭では、ケーキを囲んでクリスマスが祝われました。なかでも、銀座の賑わいはものすごいもので、わざわざラジオで中継されていたほどです。

無条件降伏という有史以来、前代未聞の敗戦を経験した日本は、戦後大きく変化をせざるをえませんでした。「天皇がバイブルを読んだ日」(レイ・ムーア編、講談社、1982年)には、天皇の意思で、クエーカ教徒のバイニング米国婦人が皇太子の家庭教師として招かれ、皇族一家がクリスマス・キャロルを唄い、植村環牧師から福音書の講義を受けたという時代です。

明治以来、天皇を中心とした神道国家から、アメリカに代表される価値観へと180度の転換を求められた時代でありました。しかし、その影響も、米軍駐留の終わりである、1951年のサンフランシスコ条約調印まででした。

敗戦後の6年目、昭和26年を境に、次第に、日本は戦前回帰し始めます。

(印象深いのは、ちょうどその頃から創価学会が台頭したことです)。

「建国記念日」(1957年)の制定、「元号法」(1979年)が法制化され、「靖国神社国家護持法案」が提出されました。いつしか気が付けば、身の回りから米人、特に宣教師たちの姿はいなくなり、夜を徹して祝われた異常なクリスマス・ブームは次第に下火となりました。

敗戦後、経済大国となった日本は、こうして大きな変化・変節を迫られて今日を迎えています。